

ITL NEWS

No.59

ES 制度の効果的な活用方法

まえがき

本学には、ES (Educational Supporter : 教育サポーター) 制度があります。ES は教員が授業をスムーズに進め (授業サポート)、受講生が授業内 (ラーニングファシリテーション) と授業外 (学習サポート) で効果的に学習を進めるためのサポートを行っています。同時に、ES 活動を通して ES 自身も学び成長していくことも、この制度の目的のひとつになっています。

2 年前に生じたコロナ禍によって、世界的に教学は大きな影響を受けました。メディア授業の導入を余儀なくされ、教員と学生とのコミュニケーションが大きく制限されました。今もなお感染の勢いに衰えを見せない状況の中、コロナ禍における学びの実態を明らかにするため、本学では 2020 年度と 2021 年度に、学生および教員を対象とするアンケートを複数回実施しました。その中で、「メディア授業と対面授業の双方における ES の活用」が重要なテーマとして浮かび上がりました。併せて、「授業におけるフィードバック」の必要性も再確認されました。これらの結果は、アフターコロナにおける学びにおいて、教員と ES の連携および ES と受講生の関わりが、より一層重要な役割を果たすことを示唆しています。

そこで、2022 年 12 月 9 日に行われた 2022 年度第 4 回教学実践フォーラムでは「ES 制度 の効果的な活用方法」と題して、鳥居朋子先生 (教育開発推進機構)、西岡亜紀先生 (文学部)、山口洋典先生 (共通教育推進機構) のお三方にご登壇いただき、本学における ES 制度の位置づけを改めて確認するとともに、ES 制度を効果的に活用するノウハウについてご発表いただきました。これらの創意工夫された実践は、「出席・提出物確認」「資料配布」「机間巡視」に留まらない ES 制度の効果的な活用に向けて、大いに参考になるものと思います。

Educational Supporter 制度の趣旨および研修プログラムの概要

～ ES 自身の成長へのまなざし～

立命館大学教育開発推進機構 鳥居 朋子

Educational Supporter (ES) は、立命館大学固有の教育サポーターであり、正課授業において教員や学生の支援を行う学士課程学生のことを指す。ES 制度は、2003 年全学協議会での確認をふまえて、キャンパスに学ぶ学生が「確かな基礎学力」と「豊かな個性」を持つ学生として成長することを実現するために導入され、約 20 年の歴史を有している。もとより、ES 制度には 3 つの機能がある。第 1 に、受講生の視点に立ち、支援される側の学生の喜びと成長を目指す学習支援の機能である。第 2 に、教員の視点に立ち、教職員の喜びと業務の改善に繋がる授業改善の機能である。第 3 に、ES の視点に立ち、支援する側の学生の喜びと成長を実現する ES 自身の成長機能である。この点で、ES 制度を活用する教員が、単なるアルバイトとしてではなく、成長する主体として ES を位置付けることが重要になる。

ES 制度の教育効果については、コロナ禍前より受講生のアンケート結果に示されていた。「2011 年度 ES 導入授業の受講生アンケート（前期・後期）」では、ES の活動により授業が良くなった点として、授業の運営がスムーズになったことが最も多く挙げられている。「教員に加えて ES さんがいたことによって、疑問点をすぐに解決することができた」等の自由記述から、学習支援に効果を発揮してきたことが読み取れる。

コロナ禍を機に ES の活動人数は増加し、本格的にハイブリッド型授業が始まった 2021 年度は 1,630 人(延べ人数)となった(前年度より 635 人増)。教員の授業運営にかかわる負担増加に基づく支援ニーズや、2021 年度に実施された ES 関連予算の追加措置等が背景にあると考えられる。「2021 年度春学期 ES 業務報告書」によれば、ES 自身が行った活動として、Zoom での同時配信の準備・片付け、入室管理、授業内の Zoom 上のトラブル対応、チャットにおける受講生の質疑応答の整理、ブレイクアウトセッションの作成やグループワークの助言等が挙げられており、ハイブリッド型授業だからこそ必要となる支援を提供していることがわかる。

こうした支援を受け、教員からは、「授業のリアル配信の際、講師が講義の内容に集中することができ、たいへん有難かった」(2021 年度「授業支援に関する教員対象アンケート」)や「ライブによるオンライン授業であったため、ES と進め方やオンラインツールの使い方が学生等にとって難しくないか、困難がないか等を相談し、学生目線での的確な助言を得られ、スムーズな進行が可能となった」(「2021 年度春学期 ES 活用報告書(教員回答)」)等の声が寄せられており、ES がハイブリッド型授業において円滑な双方向型授業の実現や授業改善に貢献していることが把握できる。

さらに、ES 自身の成長については、「2021 年度春学期 ES 業務報告書」から、ES 活動を通じて獲得した力量に対するかれらの認識が確認できる。とくに、「相手の意見を丁寧に聴く力」、「他人に働きかけ巻き込む力」、「自分の意見をわかりやすく伝える力」、「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」、「物事に進んで取り組む力」が上位 5 つに挙げられた。加えて、「ES 制度について、今までは授業サポートという形で先輩が参加しているという曖昧な印象だったが、実際に経験し、下級生と話し合うことで、新たな気づきを得られたように感じる」等の自由記述回答があり、ES 制度の有効性や活動を通じた成長を ES 自身も実感していることが窺える。

これらのエビデンスをふまえ、立命館大学では ES 研修プログラムの改訂を重ねつつ、全学的に提供している。下図の通り 7 つの研修で構成されており、原則的に基本研修、ファシリテーションスキル研修、および ICT 研修の受講は必須である。とくに、Zoom で実施するファシリテーションスキル研修では、的確なファシリテーションの方法や留意点を理解するとともに、ブレイクアウトセッションを用いて多様な学部所属する ES たちが自分の経験を語り合いながら、先輩 ES からの助言を得つつ、活動に対する不安を払拭し具体的なイメージを形成する場となっている。

2022年度秋学期 ES 研修のご案内							
研修概要	基本研修	ファシリテーション スキル研修	ICT研修	機器操作 体験会	授業における感 染防止対策研修	はじめての ライブ配信型授業 －Zoom編－	はじめての ワンデマンド型授業 －Panopto編－
ES制度の概要、役割、 心構えの理解 ・ビデオ・ESとは ・本学の学生の特徴 ・ESの機能、活動内容 ・業務経路・留意点等	ES制度の概要、役割、 心構えの理解 ・ビデオ・ESとは ・本学の学生の特徴 ・ESの機能、活動内容 ・業務経路・留意点等	①的確なファシリテーションの留意点を理解し、受講生の個人ワークやグループワークのファシリテーション等に活かすことができる。 ②ES活動に対する不安を払拭し、活動の具体的なイメージを持つことで取組意欲を高める。	授業サポートにおいて必要となるICT機器・システム・ツールを体系的に理解するとともに、発生頻度の高いシーン（受講生からの質問対応やグループワーク、授業準備（教室機器操作、授業進行補助等）において、ツール・システムを適切に操作することができるようになる。	「ICT研修」を受講しても、なお、教室機器の操作等に不安がある場合は、実際の教室で機器操作を体験したり、ICTツールに関する質問・相談をすることができま。	3月末に実施された、教員を対象とした研修会の動画を視聴できます。対面授業を実施する上で必要となる、マスク着用の呼び掛けやフェイスマスクの配布場所、座席配置、そして体調不良者が発生した場合の対応などについて説明されています。授業支援もこれに準じて対応して下さい。	1月に実施された、教員を対象とした研修会の動画を視聴できます。はじめてライブ配信型授業を予定している教員を対象に、Zoomの具体的な操作と活用事例が説明されています。また、教室に設置されているカメラ機器との接続についての説明もあります。	1月に実施された、教員を対象とした研修会の動画を視聴できます。はじめてVOD配信型授業を予定している教員を対象に、動画編集・配信プラットフォームである「Panopto」の具体的な操作と活用事例が説明されています。
受講形態	VOD視聴 (約15分)	ライブ配信 (約1時間)	VOD視聴 (約1時間)	対面	VOD視聴 (約45分)	VOD視聴 (約30分)	VOD視聴 (約30分)
必須/任意	必須	必須	必須(*1)	任意	任意	任意	任意
受講手当(*3)	無し	1,024円	1,024円	無し	768円	512円	512円
受講時期(視聴可能期間)(*4)	9/26～11/30	9/27、10/5、10/13 5限(*2)	9/26～11/30	10/3 @BKC 10/4 @OIC 10/6 @KIC	9/26～11/30	9/26～11/30	9/26～11/30
修了要件(*5)	VOD視聴 + 受講後アンケート提出	研修参加 + 受講後アンケート提出	VOD視聴 + 受講後アンケート提出	無し	VOD視聴 + 受講後アンケート提出	VOD視聴 + 受講後アンケート提出	VOD視聴 + 受講後アンケート提出
受講方法	視聴する(Click!) 9/26公開予定	参加申込 9/11以降OPEN	視聴する(Click!) 9/26公開予定	参加申込(Click!) 9/11以降OPEN	視聴する(Click!) 9/26公開予定	視聴する(Click!) 9/26公開予定	視聴する(Click!) 9/26公開予定
受講後アンケート	受講後アンケート 入力(10/1 OPEN)	研修当日に ご案内します	受講後アンケート 入力(10/1 OPEN)		受講後アンケート 入力(10/1 OPEN)	受講後アンケート 入力(10/1 OPEN)	受講後アンケート 入力(10/1 OPEN)

*1 担当する業務において、manaba+R、Zoom、Panoptoのいずれのシステムも操作する機会のないESは受講不要です。
 *2 過去に受講した方も再度受講して下さい。所属キャンパスに関わらずいずれの日程でも参加可能です。
 *3 受講した研修の合計額が1月以降の給与に加算されて支給されます。
 *4 VOD研修の内容は2021年度に配信されたものと重複する部分がありますが、過去にこれらの研修を受講した場合も再度受講することは可能です。その場合、受講手当も支払われます。
 *5 業務の都合上9/26よりも前に視聴する必要がある場合は、下記までお問合せ下さい。
 *6 ファシリテーション研修については、参加の実績と受講後アンケート提出の両方を以て手当が支給されます。それ以外については受講後アンケートの提出を以て手当が支給されます。
 *7 VOD視聴による研修については、動画を視聴していても受講後アンケートが提出されていない場合は受講完了と見なされません。ご注意ください。

(データや情報は 2022 年 9 月時点)

図 1 ES 研修プログラムの概要

あらためて振り返れば、コロナ禍の影響が長期化するなか、個々の授業でどのようにES制度が活用され、どのような効果を生み出しているのかということが本フォーラムを通底する問いであった。とくに、受講生とともに学び成長するES個人のパーソナリティや経験への視点を大切にしつつ、今後のES制度の効果的な活用や、教員とESの連携のあり方について考えを深める貴重な機会になった。西岡氏と山口氏による豊かな実践に基づく報告からは、多様な授業の文脈において受講生、ES、教員のつながりを構築していくためのヒントが得られたように思う。そうした関係構築の後方支援を担う仕組みとして、DX時代の学習・教育の様相に合致したES研修プログラムを継続的に見直していくことが課題になろう。

学部生の多様な〈個性〉を活かす

～ESの人選と運用のポイント～

立命館大学文学部 西岡 亜紀

1. 自己紹介または前提条件

自己紹介も兼ねて、本報告の前提条件をいくつか示す。筆者が所属するのは文学部のなかの言語コミュニケーション学域という比較的新しい組織である。応用言語学、コミュニケーション学、日本語教育学に比較文学（筆者）と、多様な専門の教員が集まる。現状では直属の大学院はなく、音声表現や文章表現などの理論と実践との双方向の学びや社会連携といった学部生の育成に重点を置いている。したがって、ESをTA育成の準備段階に位置づける、というスタンスで運用したい場合には、本報告は必ずしも参考にならないかもしれない、ということをあらかじめ断っておく。ただ、そうした前提条件があったとしても本報告で重視する「成績や研究能力よりも総合的な包容力と寛容なパーソナリティ（他者への想像力）」というESの条件は、ESに限らないTAや教員も含めて、少子化時代の多様な〈個性〉に応える教育に携わるすべてのスタッフにとって汎用性がある観点、と言えるかもしれない。

2. ES人選のポイント

まず、ES人選のポイントを整理する。学部生を採用するからには総合GPAも高いしっかり者で、「成績

優秀」「挫折が少ない」「教師に付度できる」といったおとなしく従順な優等生タイプをとというのが、まあ自然な発想であろう。「もの習いがよい」優等生と言い換えることもできる。実際に、ES のリストを見るとそうした学生の名前が並ぶ傾向にある。

しかし、実際の運用場面では、必ずしも従順な優等生が万能ではないという声も多い。つまり「もの習いのよい」学生が「もの習わせ」がよいとも限らない。あくまで喩えだが「いま泣いている学生のダメな点をリスト化するのはあとでよいので、まずは泣いている学生の傍に黙って座ってあげてほしい」と言ったような事態が起こるのである。受講生を見てほしいときに教員の顔色をうかがうという動きである。大学生であれ、受講生は一人一人異なる背景を持つ血の通った人間である。しかも、大人だけに相手の本質を見抜く社会性もある。残念ながら、「もの習いのよい」人のなかには、そうでない学生に対して無意識に冷たい人がかなりの頻度でいて、そうした冷たさを受講生が察知すると、グループダイナミクスは一気に崩れる（概ね本人は無意識というのが難儀な点で、教員まで同じ「もの習い」タイプの場合には、気づかぬうちに負の二乗で一層どんよりする、場合によっては欠席者が増えるのは言うまでもない）。

これを踏まえて、ES の人選で重要なのはどういったことか。少なくとも以下の 3 点である（③が最も重要）。

- ① 科目や教学とマッチングする「個性」（必ずしも総合 GPA によらない人達）
- ② 似通った授業を既習であること（少なくとも当該科目は成績上位であるほうが望ましい）
- ③ 多様な〈個性〉の学生や教員に対応できる包容力と寛容なパーソナリティ（必ずしも従順な優等生が万能ではない理由はここで、苦手分野や挫折の経験がある人のほうが、多様な受講生や教員をそっとフォローできるからである）

3. ES の運用事例

以下、具体的な運用事例を 2 つ紹介する。ES の 2 名とも筆者との信頼構築ができています。

事例① 2021 年度開講「言語表現メディア作品研究」（2 回生以上専門科目、中規模講義）

研究・創作実践のために多様な先行作品を読む参加型中規模講義である。教員の講義の後にミニ創作実践、学生による押し作品紹介でミニ分析実践を行う。実作者でない教員には手当てができない実作者の声を ES に補充してもらい、よいグループダイナミクスが生まれた。

ES の属性	・ゼミ OG（残した単位履修中 5 回生、就職活動継続中） ・高校文芸で全国 1 位の受賞歴。文章技能はオールマイティ ・受賞歴を思わせない謙虚さ／劇団裏方／地方出身
ES の仕事	・教材動画「完全なフィクションの作り方（書き手視点から自作解説）」 ・ワークのアイデア提供（短歌パズルゲーム・三文村上春樹ほか） ・ワーク・グループ討論に参加
受講生の声	・書き手の側の構えがよくわかった。 ・「フィクションのための完全なノンフィクション」という言葉、納得。 ・ワークと一緒にできたことがとても刺激的だった。 ・なぜか気が合った（笑）すごい才能なのに底抜けに優しく尊敬できた。

事例② 2022 年度開講「研究入門」（1 回生春の基礎ゼミ的な授業、30 名程度の少人数クラス）

前半はグループで文献講読、後半はグループで研究発表を行う。教学部の「コロナ禍で縦のつながりがないうちに配慮」という方針を確認のうえ、同様に交流の減った留学生の先輩を配置した。本来の大学生活からコロナ禍で失われているものをダブルで補充し好評を得た。金曜 1 限なのに欠席者はほとんどなし。

ES の属性	・ゼミ 3 回生、アジア圏からの留学生 ・スポーツでの挫折経験、母国での兵役、大学進学などを経ている ・同じ科目の成績優秀者（2 年前） ・温かい、優しい、落ち着いている（圧倒的な包容力）
ES の仕事	・講読発表 ・研究発表に対するコメント ・ワーク・グループ討論に参加 ・よろず相談

受講生の声

- ・留学生の〇さんと接して、「大学生になった実感」ありました！
- ・コロナ禍の不安助けられた。
- ・相談に乗ってくれてありがたかった。

2つの授業で共通に配慮したのは、まずは多様な〈個性〉の受講生に対応できる包容力と寛容なパーソナリティの人材を選ぶことである。そして、実作経験や留学経験や挫折経験などのESの多様な〈個性〉を活かしながら、《教室に足りないもの》を補充することである。教員の能力、社会情勢など《教室に足りないもの》の背景は授業によってさまざまだが、教員があらかじめそれらを分析しそれを踏まえてESを補充することで、よいグループダイナミクスと受講生の満足度につながった。その際教員に必要なことは、自分も含めて足りないものを把握し、そのことを謙虚に受け止め、それをサポートできる〈個性〉のESを配置するという、教室空間のコーディネーターとしての意識である。そのためには、未来のESに備えた日々の教室での人間観察や、学生との信頼構築に努めておくこと、つまりは教員が、総合成績や研究能力に一元化されない学生の多様な〈個性〉を見極める包容力を持つことが、未来のES人選と運用を支える一歩となる。

ピア・サポートを通じたモデルとライバルの関係構築の可能性

立命館大学における教育サポーター（ES）の1事例から

立命館大学共通教育推進機構 山口 洋典

自らの学部生時代を振り返って

現在、私は母校で勤務している。びわこ・くさつキャンパスが開設された1994年の入学である。理工学部環境システム工学科で土木工学を専攻していた。ただ、学生時代は阪神・淡路大震災でのボランティア活動や、戦後50年企画「世界大学生平和サミット」など、学生が担い手になる場づくりに参加した思い出が色濃く残っている。それが現在の仕事につながっていることは言うまでもない。

そんな私が筆頭者となって1999年に記した論文がある。「学生互助組織による参画型講座の展開」（山口ほか、1999）というもので、ピア・サポーターによる科目運営の意義について、立命館大学国際交流セミナーの事例をもとに論じたものである。そこでは、1997年度に導入される運びとなった広島・長崎プログラムでの「Student Assistant（以下、SA）」制度について紹介した。1996年の受講経験を経て1997年に制度の導入を提案した筆者と、1997年に受講し1998年にはSAとして参加した学生（桐山洋一郎さん）、さらには当時の科目担当教員（藤岡惇・元経済学部教授〔現立命館大学名誉教授〕）の共著で執筆した論文である。

この論文では1997年度にSA制度を試行的に導入した経験をもとに、学生参画型の正課科目の受講生が次年度の企画・運営を支える上での留意点として3点を挙げた。1つめは1人の志気が下がると集団全体の雰囲気に影響が及ぶこと、2つめはコミュニケーションギャップで孤立する受講生が出ないように振る舞うこと、3つめは良い相乗効果のためにコラボレーションの機会を積極的に導くこと、である。これらを踏まえ、「経験者として参加者の支援を行うこと」（p.129）の意義が記されている。そして、受講生のサポートを担った学生が次のサポート役を選出・推薦することが、プログラムの継続・発展に奏功する、とまとめられた。

学びのコミュニティでの経験をリレーする

今回、自らの学生時代の経験を約20年ぶりに見つめ直す契機となったのは、「ES制度の効果的な活用方法」というテーマでの教学実践フォーラムで話題提供する機会を得たためである。特に事前の打ち合わせの折、ESの活用方法だけでなく、候補者の選出や起用の方針についても触れて欲しい、と期待が寄せられた。前掲の論文の知見を踏まえれば、正課科目でのピア・サポーターには受講生にとって望ましいサポートの内容や水準や到達点を自ら考え行動することが肝要ということになる。よって、このように省察的な学習者の素養をピア・サポーターが発揮し、模範的な受講生の姿を受講生に提示することが、筆者の観点でのESの効果的な活用法と捉えている。

そこで今回フォーラムの話題提供では、現在、筆者の授業でESを務めている曾野部えみさん（国際関係学部4年生）への事前収録のインタビューを紹介した。彼女もまた、過年度の受講生である。インタビューの中では、3科目・5クラスのESでの経験を振り返り、授業内での動きが語られた。要約すれば、(1)ESの役割は教員と受講生の「架け橋」である、(2)小集団の授業では議論の停滞時に介入し、大規模の講義では特定の学生のみに関わらないなど授業規模で動きを変えている、(3)コロナ禍では「正解がない」ことを特に強調した、(4)受講生でも教員でもない立場だからこそ対応可能な事を探す、である。

約20年前、筆者が導入を提案したのはTAの学生版としてのSAだった。ここでES自身のESについての語りに着目すると、ESは教員のアシスタントではなく、学部や学年の違いを越えて学生の学びと成長へのサポーターという役割であることがわかる。そのため、ESが授業内で効果的な業務を担ったとき、受講生にはESが学びのモデルであり、時に切磋琢磨する相手としてライバルにもなる。そうしてESの業務が受講生に効果的であったとき、同じ学生としてESもまた受講生の振る舞いを通じてさらなる学びと成長の契機を得ることになる。

山口洋典、桐山洋一郎、藤岡惇「学生互助組織による参画型講座の展開－立命館大学国際交流セミナーの取り組みから－」
『経済学教育』第18号、1999年、125-130頁



立命館大学教育開発推進機構

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL: 075-465-8304 FAX: 075-465-8318 email: fd7lcer@st.ritsumei.ac.jp <http://www.ritsumei.ac.jp/itl/>

発行日: 2023年2月 編集・発行: 立命館大学 教育開発推進機構